

年輪年代学的手法による 平城宮第一次大極殿院西楼 出土木簡の検討

1 はじめに

年輪年代測定では、概ね100層以上の年輪を有する試料を対象とするのが一般的で、年輪数が少ない小型の木製品にその手法が適用される機会は必ずしも多くない。いっぽう、筆者らは主に同一材由来の推定を目的として、年輪年代学的調査手法を小型の出土木製品に対しても積極的に適用することを目指している。近年の成果として、一括性の高い試料群を分析対象とすることにより、その試料群の同一材の推定を進めることができる事例が増加した¹⁾。

このような背景のもと、現在、筆者らは木簡を対象とする年輪年代学的調査を進めている。本稿では、平城宮第一次大極殿院西楼から出土した木簡群に対して年輪年代学的手法を適用した検討の事例を紹介する。

2 分析対象

分析対象は、平城第337次調査において、平城宮第一次大極殿院西楼から出土した木簡群である²⁾。

西楼は、第一次大極殿院の南面回廊西半に設けられた楼阁建物で、東西棟総柱建物であるが、側柱筋の柱のみ掘立柱で他の柱は礎石建ちという、特異な構造を有する。また、天平勝宝5年(753)11月の年紀をもつ削屑が出土していることから、解体時期の上限がおさえられる。

西楼の木簡はいずれも掘立柱の抜取穴から出土したもので、総数は1,415点であるが、そのうちの大多数を占める1,247点が削屑である。この削屑の中には良好な柾目材のものも多く含まれ、人名等を記す記載内容、および筆跡や木目の類似などより、整理作業時点ですでに同一簡に由来する可能性が想定されていた。今回は、これらを対象に同一材の推定を中心とした年輪年代学的検討を実施した。

3 年輪年代学的検討

年輪幅の計測は、分析対象を接写撮影し、その写真を用いてコンピュータ上で計測する方法でおこない、クロスデーティングは、年輪曲線をプロットしたグラフの目

視評価と統計評価³⁾をあわせておこなった。これまでに、年輪曲線の前年に対する増減のみならず絶対値についても酷似し、同一材由来の可能性が高い削屑のグループを複数見出している。ここでは、そのうち10点⁴⁾を紹介する(図23、24)。

すべて同一材由来と推定されるが、文字の天地を基準にすると、A群とB群とでは年輪の向きが異なることがあきらかになった。ここから、元の木簡には表裏両面に墨書が施されていた可能性、または同一材から製作された木簡が複数個体存した可能性などが考えられる。なお、図24に示した配列は、より新しい年輪が刻まれている順に並べた、あくまで仮のものであり、横方向の関係は動かないものの、縦方向の並び順は変わり得ることに注意されたい。いずれにしても単一の木簡に複数名分の人名や位階が記されていたとみられ、元の木簡は歴名簡(人名リスト)の類とみなされる。

4 歴名簡の実例

①～⑩に記された文字は、いずれも端正で謹直な楷書体といえる。また、特にA群について、仮にすべての断片が同一簡に由来するならば、元の木簡には少なくとも5段分の記載が存したこととなる⁵⁾。

以上のような特徴から想起される木簡として、平城第530次調査出土の歴名簡があげられる⁶⁾。井戸枠に転用されていたもので、上部は欠失しているが6段分(長さ1180mm)が遺存し、1段に7・8名ずつの人名が丁寧な文字で列記される。造油繩生や直丁・駆使丁などがみられることや、秦氏系のウジ名が多いことなどから、宮内省あるいは大蔵省関連の現業官司の構成員を羅列した歴名と考えられている⁷⁾。西楼出土削屑の原形として、このような大型歴名簡を想定することもできよう。

5 おわりに

以上のように、西楼出土の削屑群について、年輪年代学的にも同一簡由来のものが含まれる可能性を支持することができた。いっぽうで、同一材に由来する可能性が高いにも関わらず、木取りと文字の天地が異なるグループが見出されたことは、本木簡群に関する様々な理解が深まる可能性を秘めるものといえる。現在、同一遺構出土の削屑200点余りを検討中であり、さらなる成果があ

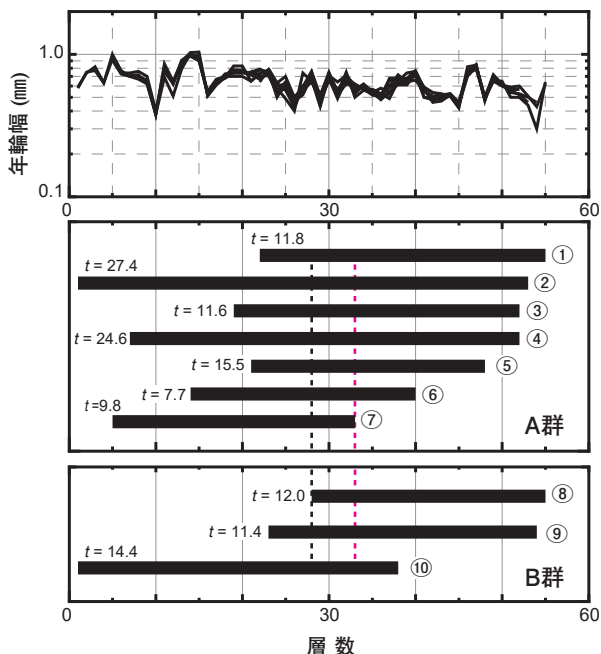


図23 分析対象木簡の年輪曲線(10点を重ねて表示)とパーチャート(破線は図24と対応)

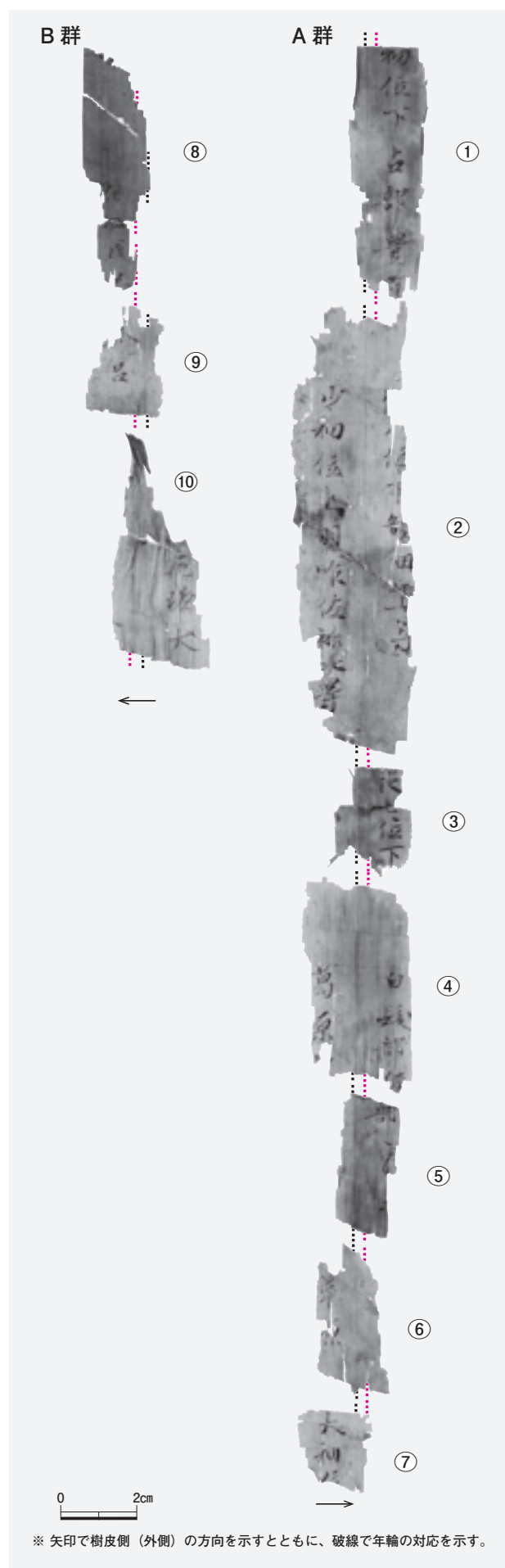
ることが期待される。

なお、本研究はJSPS科研費JP16K16918およびJP17H02424の助成を受けたものである。

(星野安治・桑田訓也・山本祥隆)

註

- 1) 星野安治・浦蓉子・山本祥隆「年輪年代学的手法による木簡研究の可能性」『木簡研究』40、2018。浦蓉子・星野安治「年輪年代学的手法を用いた古代木製祭祀具の研究」『考古学雑誌』101-2、2019ほか。
- 2) 奈文研『平城宮木簡七』奈文研史料85、2010。
- 3) Ballie M.G.L. and J.R. Pilcher 'A simple cross-dating program for tree-ring research' "Tree-Ring Bulletin" 33, 1973. クロスデーティングの統計評価がスチューデントの t 値で示される。図23では、平均年輪曲線に対する各分析対象の t 値を示す。
- 4) 『平城宮木簡七』での番号は、①:11648、②:11641、③:11636、④:11682、⑤:11699、⑥:11661、⑦:11645、⑧:11670、⑨:11722、⑩:11665である。
- 5) 横方向の位置関係から、③・⑤および⑥・⑦はそれぞれ同じ段から削り取られた断片の可能性もあるが、他は同一簡由来であれば段を異にすると考えられる。
- 6) 『平城木簡概報 44』16頁上段(135)。
- 7) 渡辺見宏「木簡」(神野恵・鈴木智大・小田裕樹・林正憲ほか「右京一条二坊四坪・二条二坊一坪・一条南大路・西一坊大路の調査ー第530次・第546次・第560次」『紀要 2016』)。



※ 矢印で樹皮側(外側)の方向を示すとともに、破線で年輪の対応を示す。

図24 分析対象木簡